
弟は狼少年

ねむこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弟は狼少年

【Zコード】

Z3779Z

【作者名】

ねむ二

【あらすじ】

弟ができた。それも高一の。母親の再婚でできた一つ下の弟は驚くくらいの美貌を持ち、ある日を境に日々わたしにちよつかいをかけてくるようになった。でもその正体は
不定期更新です

うらりかな春のある日。

わたしに高1の弟ができた。

母親が再婚してできた弟は、じつちが落ち込むほど
美麗だつた。

すらりとした体つきに長い足。

明るい栗色の髪はツーヤツヤのサーラサラで、ちょっとぴり田尻が上
がつたぱっちり一重の黒い瞳はキラキラしてた。

まだ成長途中なのか少し背が低かつたけど、平凡なわたしとは違う
そのあまりに整いすぎた顔立ちに、これから未来を想像して泣き
そうになつたの覚えてる。

あれから三ヶ月。

想像通りの未来にわたしあげつそりしていた。

高校からの帰り道に唐突に呼び止められるのなんて日常茶飯事。

「先輩！これ、弥生くんに渡してくださいねー絶対ですよー」

可愛く脅しておいて、笑顔で走り去る年下らしき他校の女子高生を見送る。

押し付けられた手の中のクッキーを包みを見て小さくため息が

出た。

左手の紙袋にはもう入りそうにない。

仕方なくコンビニの袋に放り込んで手首にかける。

もうすぐ夏休みだからか今日は収穫が多いなー、そんなことを考えながら暑い日差しの中、ふと傷みやすいものがないことを願った。誰もいない家に入ると手洗いとうがいをしてから冷蔵庫を開ける。紙袋とコンビニの袋から食べ物らしきものを選つて突っ込み、ついでに出した麦茶をコップに注いでから麦茶を戻して冷蔵庫を開めた。じっくりじっくりと飲み干してふはーっと一息つく。

コップを軽く濯いでテーブルの上に置くと、のろのろと一階に上がり自分の部屋を開ける。

むわっとした熱気に顔を顰めながら、机の横に鞄を置いてカーテンを閉めると高校の制服を脱ぐ。

制服はくしゃくしゃにならないようにハンガーにかけてから着替えを持つて、またのろのろと洗面所に向かう。

シャワーで汗を洗い流し、雑に拭いてからパンツとTシャツだけ身につけてさつさとリビングに入ると扇風機をつけてTシャツの裾から風が入るようになじゅっと持ち上げた。

あ、ー、きぼぢーーー・・・

ほべべべべと風を受けて5分くらいそうしてたと思つ。

あ、と思い出して自分の部屋に上がつて鞄を開けた。

これ、あなたの弟さんに渡してくれる?

クラスのアイドル的存在の彼女から受け取ったブツを見る。
食べ物だろうか? 食べ物だつた場合、この室温は危険だつた。

コンコンと小さくノックしてからそつと扉を開く。

北側だからか、わたしの部屋のようにもわっとした熱気はあまりな

くじひよつと羨ましくなつた。

「おじやましまーす・・・」

小さく呟きながら恐る恐る侵入する。

下の冷蔵庫はもう一杯だったがヤツの部屋にも小さな冷蔵庫がある。これが助かるにはそこに入れておくしか道は無いのだ。

決死の覚悟で綺麗に整頓された無機質な部屋の奥まで進む。容量の小さな黒い冷蔵庫の前にしゃがみこみ、そつと冷蔵庫を開けた。

ん?なんだあれ。

手前にあるスポーツドリンクに隠れるように、薄めのお菓子の箱のようなものが1箱すみつこに入つてた。

少し覗き込んでチョココレートだと確信した。

なーんだ、じゃあこれもここに入れとけばいいや。

クラスメイトからのプレゼントをその箱の手前に置いて冷蔵庫を閉めた。

作戦の完了に、やり遂げた感一杯で一つ頷く。立ち上がるうとして膝に手をかけたところで。

「見たのか?」

予想もしてなかつた事態に肩が思いつきりびくついた。

黒い冷蔵庫の表面を見ればわたしの後ろにいる人影がぼんやりと映つている。

朝の話では今日は部活で遅くなるんじゃなかつたのか。

驚きすぎてしゃがみこんだままの右肩に、そつと手が置かれた。

「見た、よな?」

そろそろとヤツの手が肩から首をなぞり、首を半周するみひみ手の平を添えてうなじを親指の腹が上下する。くすぐったくて身を捩ると、すぐ背後でヤツもしゃがんだよひだつた。

「もう限界なんだ・・・」

わかつてよ、姉ちゃん。そう囁いてTシャツの上から触れる手にわたしは激しく動搖していた。

02 嫉妬（前書き）

たぶんR-15くらいだと思います。

懇切丁寧に襲われた。

必死の抵抗も華麗にスルー。

あげく。

「人の部屋に黙つて入つといであんな格好してたのが悪い。」

などと非はわたしにあると言に出した。
実に嬉しそうな顔で。

あんな顔してるんだから選り取り見取りなはずなのに、どうしてわ
たし？

まさかシチュエーションに萌えてるだけとか。

あとは手近で済ませたと考えるのが妥当かと思つたが、やたらと優
しかつたのが気になる。

わたしが初めてだつたから？

わずかな痛みと違和感の残るお腹をさすつて、だるい体でベッドに
入る。

食欲がなくて晩ご飯もんまり食べられなかつた。
はあ、とため息を吐いてから薄いタオルケットをお腹にかける。
目覚ましをセットして電気を消すと、ぼんやりと天井を見上げた。

眠れないと思つたけど、シャツと短パン姿で「ハハハ」してたりつつ
の間にかいつとじして……

ふと、何だか息苦しくて目を覚ますと暗闇のなか目の前にヤツのド
アップがあった。

「・・・んむつー?」

荒い吐息と口の中で蠢く舌の感触。

後頭部を押さええる大きな手の平。

だんだんはつきつしてきた意識でそれらを感じ取ると慌ててヤツの
胸を押し返した。

いつからやうされていたのかわからない。

それでもヤツの興奮具合と溢れる唾液に、これは短くないと瞬時
に結論を出す。

何とか押し返そうとする両腕を片手で簡単に押さえ込まれ、それな
ら急所を蹴つてやろうと足に力を入れる。

バレたのか見越していくのかヤツが片足で太腿を押さえてきた。
体勢がわずかに変わつて、合わさる唇に隙間ができる。

追いかけるような仕草をした唇から固定された顔を背けた。

「ひょっとー」

大声で怯ませようとしたのに、荒い息のまま鼻が触れるくらいの距
離でじつと見下ろしてくれる。

その唇が、ふつと吐息のような笑みをもらしたよつだつた。

「いいの? 父さんたちに見つかっても。」

なんだと?

わたしは、今、脅されて、いる・・・?
目を見開き硬直したわたしを見つめたままヤツが楽しそうに指を這わせ始めた。

眠い目をこすり学校へ向かう。

部活で先に家を出るアイツと登校時間が重なったことはこの二ヶ月一度もない。

ただ、これからはアイツの下校時間には気をつけるべきだろ。そんなことを考えていて、よっぽど酷い顔をしていたのかもしれない。

教室に入るとクラスメイトの爽川君さうかわが話しかけてきた。
爽やかなイケメンという意味で爽川と呼ばれる草川君くさかわが。

「大丈夫か? 気分悪いなら保健室に連れて行こうか?」

ちょっと覗き込むようにしながらそう言つ爽川君はみんなが言つだけのことはあった。

「ううう、大丈夫。ありがと。」

なるべく明るく言つと、爽川君は少しだけ首を傾げる。

「本当か？もし悪くなつたら言えよ、俺保健委員だからさ。」

頷いてみせると、じゃあ、と去つて行く後ろ姿が確かに爽やかだつた。

爽川は伊達ではなかつたのだ。

家に帰つていつものように部屋で制服を脱ぐ。

スカートのホックを外して白い半袖シャツの裾を引き出した。
シャツのボタンを順番に外し、最後のボタンに指をかけたところだつた。

足音もなかつたのに突然大きな音をたてて部屋の扉が開いたのだ。
普通びっくりする。

驚いて顔を上げると、怒つたような表情をした現在部活中のはずの
アイツが仁王立ちしていた。

どうしてヤツがここにいるのかわからなくとも、ヤツのファンクラブの情報網があてにならないことはわかつた。

シャツの最後のボタンに指をかけたまま前を隠すようにして卑く出て行けと視線で促す。

わたしは着替え中、見てわかんない？

そんな堂々と覗きをしてないで、ほら、早く！

無言で睨みつけると勝手にずかずか入ってきて力任せに脱ぎかけの
シャツを剥ぎ取られた。

なんでー！？

そのままシャツをゴリのように投げ捨てて、呆然としているわたし
を今度はヤツが睨みつけた。

「あの男、姉ちゃんの、何？」

「……あの、おとこ……？」

怒りに燃える瞳に獰猛な光が宿つてゐるような気がする。

「朝、教室で姉ちゃんに近づいてた男だよ。」

それはもしかして爽川君のこと？

特に男友達もいないし、今日話した男子は爽川君だけだつたし……

「……彼は、わたしが気分悪いんじやないかつて、心配してくれただけの、ただの、クラスメイト……」

え、でもちょっと待つて、アンタそれをどこで見てたの？

アンタのクラスは一階でわたしのクラスは二階、そのうえ別校舎だよ？

しかも教室の出入口は窓とは反対側だし……まさか廊下？いや、「イツが廊下にいたら周りはもつと煩かつたはず……え？どういうこと？

一步後ずさつたら素早く左腕を掴まれた。

「何で、逃げるの？」

ぐいっと左腕を引っ張られて、足がよろけて転びそうになる。

転ぶ前に抱き寄せられて閉じ込めるように背中にヤツの腕が回つた。同時にぎりぎりと左腕にかかる痛みが増していく。

「……痛い。」

小さく抗議すると、やつと気づいたのか手の力が抜けた。

「いあん・・・」

そう言ひてそつと解放された左腕はヤツのササギの形でぐわっと赤くなっていた。

見た目通り学校では優秀な成績を修め運動神経も悪くないのに、怒つたらこんな加減もできないのか？

半袖じや隱せないとこころに残る痣にため息が出た。

明日どうしようかとそこを見つめていると、今度は添えるへりの力で労わるように左腕に触れてくる。

その手がそこをゆっくりと撫で、痣を見つめはじかいつひとつといふ姿は少しだけ可憐く見えた。

03 嗅覚（前書き）

たぶんR-15くらいだと思います。

荒い吐息に混じって姉ちゃん、姉ちゃん、とうわ言のよひに繰り返しながら、しつこいくらいにねちっこく責められた。

帰ってきたばかりで今は汗臭いからやめると怒った言葉は当然スルーされ、それどころかわざと嗅いで回つて鼻を擦りつけては悦んでいた。

コイツに変な嫉妬をさせではないと身に沁みてわかつた出来事だった。

そして、わたしは学校を休むはめになつた。

朝起きてわたしがうまく立てなかつたのをヤツが見ていたのだ。階下での、体調が悪いみたいとか心配そうな声が聞こえて、どの口がそんなことを白々しく言つてるのかと怒りが湧いた。

昨日のねちっこいのに加えてヤツに早朝から1回襲われたせいでこうなつているのに。

まあ、薄くなつたとはいえ癌のこともあるから微妙なところだけど・

ベッドに寝転んだまま左腕を見てため息を吐いた。

そのとき、コンコンとノックの音がして少しだけ扉が開く。

「すぐ帰つてくるから・・・」

扉の隙間から少しだけ顔を覗かせ、心配げにこちらを窺つていたが

ふと逡巡するように視線を下げた。

時間にしてわずか一秒、いや一瞬。

すぐに廊下の左右を見回して部屋に入つてみると扉を閉めた。

数歩でベッドに近寄つてきて膝をついて覗き込み・・・

あ、やばい。これは、と思ったところで簡単に捕まつてキスされた。開けまいと思つても軽く鼻を摘まれ、息苦しさに開いた隙間に舌が捻じ込まれる。

またこれー！？

いつできますのキスならもつと可愛くやりなさいよーーー！

息も絶え絶えの中、最後に思いつきり舐め上げて微笑むとヤツはやつと登校して行つた。

はらはらと散りゆく桜が綺麗だつた。

「あの、これから姉さんつて、呼んでいい？」

じつと見つめてくる黒い瞳に、気づけば囚われたように頷いていた。

あの日の、まるで犬ころが慕つような素直な眼差しが可愛かつた・・・

ピンポーン、と鳴つてぼやあつと目が覚めた。

あーあ、あの頃はヤツも可愛かつたな・・・

そんなことを思いながら一階用のインターホンで応答する。

「・・・は、い・?」

扇風機をつけて寝てたからか、のどがいがいがして上手く喋れなかつた。

『あ、悪い。寝てたか?俺草川だけどプリント持つてきたんだ。今大丈夫か?』

「うん。ちょっと待つてて・?」

自分の格好を見下ろして短パンの上にスカートをはぐ。Tシャツの下のブラを直しながら階段を下り、いがいがするのどにお茶を流し込んでから玄関へ向かつた。
玄関のドアを開けるとスポーツバッグを肩からかけた草川改め爽川君が立つていた。

「わざわざ」めんね?』

「あ、いや、俺も昨日のこと、ちょっと謝りたくて・?」

何か爽川君に謝られるよつたことあつたつけ?

昨日?

「ほり、俺、昨日体調悪そうだったの気づいてたのに、あのとき保健室までちゃんと連れて行つとけば今日は休むこともなかつたんじ

やないかと・・・

爽川君は爽やかで優しかった。

これなら学校での人気ぶりも頷けるとこ「うものだ。

「あの、これは昨日のとは全然関係ないから気にしないで?」

根源は昨日のと繋がつてゐけど、そのことを爽川君に語つても仕方ないし。

それよりできれば忘れてほしかった。

「そか?なら・・・あ、これプリント。進路についての。」

バッグの外ポケットから出されたプリントを受け取り流し読む。

「うん、ありがとう。あ、ここまで遠かつたんじゃない?『ごめんね。

』

爽川君の家は知らないけど、たしかこっちと反対だったと・・・以前爽川君のことを根堀り葉掘り調べてたクラスメイトがそう言つてたような気がする。

「いや、ついでの用事があつたから遠回りじゃないよ。じゃ、また学校で。」

「うん、ほんと/or>ありがと。また学校で。」

爽やかに去つて行く背中を見送り、玄関のドアと鍵を閉める。プリントを持つて部屋に戻るとプリントを机の上に置いてスカートを脱いでから再びベッドに寝転んだ。

ふとのどが渴いて目が覚めた。

べつたらべつたらと一階に下り、冷蔵庫から缶ジュースを取り出す。冷えた缶ジュースを飲み干して分別ゴミ箱に空き缶を捨てていると玄関の鍵を開ける音が聞こえた。

時計を見ればまだ4時前だった。

今日はやけに早い。

部活はどうした。

そう思つて廊下に顔だけ出して玄関を見る。

ドアを開けて入ってきたヤツは、靴も脱がずに顔を顰めてあたりを見回した。

「誰か来た・・・？」

玄関でくんくんと鼻を動かしあたりを見回してる姿は犬みたいだ。特に何もなかつたし爽川君が来たことくらい言わなくともいいですよ。

「別に誰も・・・」

「この匂い、近所の人じゃない・・・誰が来た？」

“誰か来た”から“誰が来た”になつてる・・・でも爽川君、そんなに残るほどの匂いとかしてなかつたと思つんだけど。

「30分くらい前にそっ・・・クラスメイトがプリントを届けに来てくれただけよ。」

爽川君と言いかけてやめた。

昨日を思い返せばりくなことがなかつたから。

「姉ちゃんのクラス、この匂い……あいつか。」

えー！断定された！？

爽川君、断定されたよー！

まったく、アンタの嗅覚はどうなってるのよ？

呆れてため息を一つ吐き、玄関にヤツを残したまま自分の部屋に戻つた。

04 確認（前書き）

たぶんR-12へりこだと思こます。

ベッドにうつ伏せに寝転がって足をぶらぶらさせながら本を読んでいた。ヤツがノックもせずに入ってきた。

ちらっと見ると、シャワーを浴びたらしくTシャツとカーボパンツ姿で髪はまだ少し濡れているようだった。

そのまま真っ直ぐにベッドの横にある机の前まできて、机の上を眺め回しはじめる。

でもすぐに、その視線がぴたりと止まった。

「・・・これが。」

他にも何枚があつたのに、わざと断定して一枚のプリントを持ち上げると何の迷いもなく鼻を近づけて嗅ぎ始める。

まるで本物の犬のように。

ちょっとだけコイツの将来が心配になりつつ見上げていると、プリントを鼻から離してヤツが真顔で振り向いた。

「覚えた。」

何を？

まさか・・・

それを聞く前に印刷物特有の匂いしかしないはずのそれを机の上にすっと戻し、見上げていたわたしの肩に圧し掛かりながら首すじの匂いを嗅ぎだした。

直に嗅ぐのに邪魔だったのか、指で髪を大まかに搔き分けてうなじ

を晒し、鼻を擦りつけるようにして匂いを嗅いでくる。

徐々に肩、背中と移動していく、そのまま爪先まで嗅ぐと今度は仰向けにされて喉から胸、お腹と嗅いでいく。

全身を嗅ぎ終わって満足したのか、重なるようにして体の上にのってくると左肩に頭をのせて、ぎゅっと抱きつってきた。

「良かつた。あいつの匂いがしなくて・・・」

何がしたいのか大体わかつてたけど、やつぱりため息が出た。

爽川君とは玄関でほんの数分立ち話をしただけなのに、それで臭いが移るならどれだけ爽川君が臭うのよ。

それつきり、じつとしているヤツの頭をぽんぽんと叩く。
気は済んだ?なら早くどいて。

アンタ結構重いよ?

すると、わずかに頭をずらしてヤツが下から見つめてきた。
はにかむよくな、あの頃の眼差しで。

「いい?」

可愛く見上げるわりには人の体に足を絡め、その左手はTシャツの下に潜つて脇腹をさすつている。

くりつとした黒い瞳を見つめていて、ふと初めからこの田に弱かつたことを思い出した。

この全身で慕つてくるよつな、子犬のような真つ黒な瞳に。
道路に面した窓を見れば、レースのカーテンはきちんと閉まってる。
お向かいさんは道を挟んで距離があるから大丈夫だとして、お隣さん側の窓は遮光カーテンも閉まってるし・・・
こんなことを確認した自分にため息が出た。

すぐそばにある真つ黒な瞳に視線を合わせると、仕方ないというよ
うに頷いた。

そのとたん、ふつせふつせと揺れた尻尾は幻だと思ったかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3779n/>

弟は狼少年

2010年12月11日16時40分発行